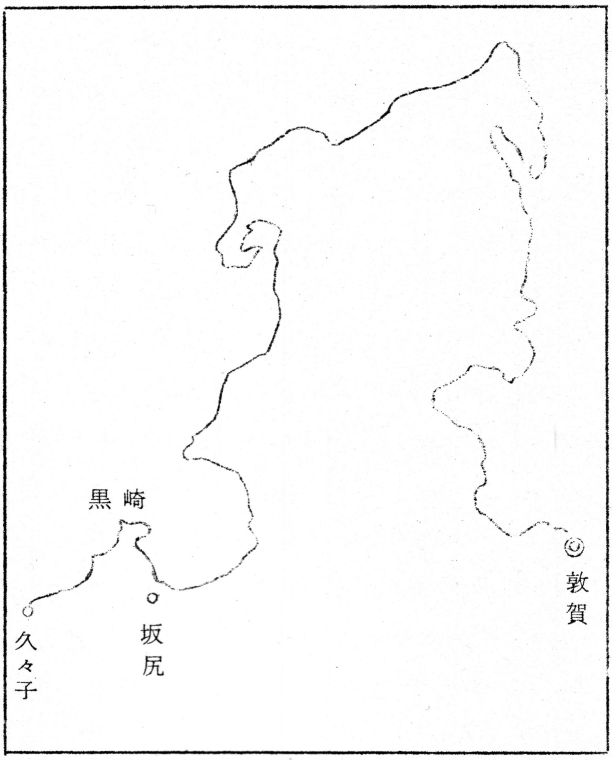
坂尻採集会漫筆

（悪食を楽しみて）



例年に行う酒井先生をお招きしての、海産動物採集会の予定地の物色には、並々ならぬ苦労がある。あそこがよかろうと目星をつけていざ採集会を開いてみると、実地調査をしておかなかったばかりにとんだへまをしでかすことが再三である。というわけで、六月下旬の上天気の一日、私は単身胴乱をかついでこの坂尻の海に出かけた。

童一人遊ぶものもないまだ冷たい海の水に、へそまでつかって、採集地としての可否を確めた。よしいけるぞとこおどりして部落に戻り、きっと集るだろうと思われる会員数十名の一泊の宿舎の心配にかかった。立派な民家が五六十軒も立ち並ぶ中で、この一団を引き受けてもらえる家は一軒も見当らなかった。思い切って小高い山の中腹にむすぶ一宇の禅寺を訪れて交渉したが駄目だという。だがせめて十数名のことなら何とかいたしますとの話。そんなところから、せめて吾々だけの採集地にと決められたのがこの坂尻である。

八月七日　そろそろと土用波の立ち初める頃である。一行十余名が、何時に変らぬいでたちで、かねて依頼の龍海寺様の庫裏二階にリックを降したのは午前十時。お寺の世話方、町内会長様宅を探して、一応の挨拶に出向けば、すぐその後から茶菓子までお持ちになって吾々の労

巻ねぎらって下さるという鄭重さ。若狭の海には毎夏に足を運んでいるが、至るところで快いもてなしが嬉しい。およそ越前の浜の人のよそよそしさ、冷やかさとはうって違った暖かさが漂よって楽しい。禅寺のことだから、なまぐさは一切禁止だろうと思っていたら、寺の奥様の手づくりの刺身や境内の貯水池のうなぎまで引き揚げられて、蒲焼がお膳に並ぶ。さても変った世の中だと首をかしげる。

坂尻は、半農半漁の土地である。砂浜と磯浜の接続した海岸である。ことに砂浜の大きな松原が美事で、時折この松原を背景にロケが行われるという。数日前に行われたロケーションのセットが波打際の岩の上にくだけていた。この松原で作られたチャンバラ映画を吾々幾度か見ているのかも知れない。

のぞきと籠瓶を持って浜に出たら、今し方海から引き揚げられたたこつぼが五六十も転がっている。走りよって中を些細に調べると、子供の小指程の大きさで、寒天状の、中に淡黄の内臓がすいて見える。「ゆうれいぼや」がいくつもいくつも見当る。吾々としては最初の採集である。海から様子の違った空中に引き揚げられて面喰ったのか、体の一端をかめの底に固着しながら、気味悪くうごめいている。幼生はいざ知らず、ほやがこんなに動く姿に接するのは最初のこと。このほやは、怪しげな光を放つとか。ゆうれいぼやとは言い得て妙である。たこつぼには、二枚貝がいくつも入っているのも珍しい。　たこが持ちこんで食べたのであろう。

波の静かな入江に立って採集を始める。六月来て、ここはよしと見定めた場所である。貝類ひとで類がすこぶる多い。わけてもくもひとでの類が一つ石の下に群がってひそんでいる。一見むかでか、小へびを思わせるような五本のうでをくねらせて逃げ迷う様は、もし初めて見る人であったら、手づかみするところか、全身に鳥肌が立つであろう。大島半島では、グロテスクなめりべの群せいに驚き、常神の島陰ではごかいの多種に目を見張り、高浜の海岸では、てながこぶしがにと、かつおのかんむりに歓声を挙げた。僅かの隔たりでどうしてこうも違った様相を呈するのであろう。博物館の陳列標本は一つ一つていねいに形を整えて、液づけする事を原則としているが、中には同じものをどっさりと入れて、数で目を引くのも一つだと、数十のくもひとでを瓶中にほうり込んだ。

若狭の海の例にたがわず、ここにも大きなばふんうにが多い。割って見ると、放卵したあとではないかと思われる程に空虚なのが多いのはどうしたことだろうか。こんな姿は、相模湾の真鶴のこの頃のうにの様子にも似通っている。

海女のいないこの土地では、血気盛りの男が、しきりと海にもぐって、その幸を採り、女は

陸にあって専らその後始末である。そだをくべてはあかうにを焼いて食べながら仕事の手を運ぶ。いかにも悠長な仕事ぶりにも若狭人のゆとりと覚える。海に冷えた体を火に近寄って暖をとれば、私たちにもこの珍味を食えという。ついでにばふんうにも、むらさきうにも焼いて食べたが、あかうにには遠く及ばなかった。その上のもてなしに、はげしくもがくまだこを篠竹にくし刺しにして火にかざし、生きながらの焼きだこを数匹も作って豪華な海のきょおうである。「あたるかも知れませんよ」。と驚ろかされながら食べる味は異なものである。そのせいか、のみ込んだたこが腹の中で動き出すような妙なうずきを覚える。坐りこんだ尻のまわりに小石に混って五十円硬貨大のきくめいしが二つ三つ。そばのおばさんの話では、昔は一抱えもあるものがよく嵐の後の浜に打ち揚げていたとか。そんなデ ツカイのが一つ欲しいものだと、目を皿にしてのぞきで探し廻ったが無駄だった。

夕食を終えて休む暇もなく浜に出た。たいつりのえさ取りのえび網を曳くためである。海上は漆黒のような暗さ、ただ遠くにいさり火が点滅し、民家の窓をもれる薄明かりが岸に並んで瞬く。真夏とはいえ、陸風が重ね着の肌に寒い。漁師と同乗の吾々三名のみが闇の中に動いているのみ。時たま海中に浅く深く、人魂のような一かたまりの螢光が現われては消える。夜光虫のいたずらであろうか。よくこんな晩のすすきつりは、つれたすすきをねらって大きなふが襲うという。

やがて舟は藻の中に入ったのか舟足が鈍り、曳き網の重みに舟が傾むく。何か珍品（私達は何時もこんな言葉で珍種の採集をねらっている）がとれればよいがと、やおら曳き網をたぐる。半畳程の小網がずっしり重い。胸をときめかして舟端に引き揚げ、懐中電燈の光に中をのぞけば、これはこれは小さいもえびとおこぜばかりである。きっと変ったものが採れるぞとその期待は全く裏切られてしまった。幾度も網を降ろして曳いたが同じことの繰返しであった。網の降ろし場所がいけなかったのだろう。漁師はひどく恐縮していたが致し方もない。小えびだけはばけつに、つくだににしてもよい程もさげて、夜気に冷え込んだ体を宿に運んだのは、11時を過ぎていた。

八月八日　海の水もそろそろ温くもった10時、弁当とお茶とを舟に積み込んで黒崎に出る。静かな波間に、あかくらげ、みずくらげがおひただしく漂う。土用風に沖から吹き寄せられたのであろうか、じっとしていれば全く水と見分けのつかない、四角で透明な細長い笠と、四本の触手のあんどんくらげが、水面に小さな波紋を描いて、力一ぱいの運動を続けている。もしこの波紋を起こすこともなかったら、あんどんくらげの姿は、おそらくは誰にも見当るまい。

三つ四つ管瓶に採ってその生態を見る。全く無色繊弱なこのくらげから、あの激しい収縮運動のエネルギーかどこから生まれるのだろうか。

赤児の頭大に太く短い房状の触手をあおってすいすい泳ぐ、碧色のひぜんくらげを一つ舟端に見つける。捕えてやろうと舟を近づければ、す早く深みに逃げていく。まるで目を持つ動物の様な動きである。ようやく海水と共にのぞきにすくい取れば、小一時間も活動を続けていた。

黒崎の断がいに舟を泊めれば、黒く澄んだ深淵で、全く舟から降りる勇気もない。やっと見つけた暗礁のような浅瀬にいかりをおろして吾々の背丈よりもっと深い岩盤に生そくするいがいの採集に取りかかる。勿論同行の浜育ちの大竹君の仕事である。吾々は手のほどこしようもなく、ただ空しく舟上から傍観するのみである。いくかたまりも、いくかたまりも、えぐり取られて桶の中に投げ込まれる。黒崎のいがいには、思いの外に共生のオオシロビンノが多い。昨年田鳥で採れたのとは比較にならぬ程このかにが多い。いがい三個に一匹の割である。

帰えり途にかめのてを一抱えも岩からかき取って持ち帰った。これも結構にうまいという大竹君の話を真にうけたからである。

今日一日は、深みに出て全く手の施しようもなかったが、各種のくらげの視察と、お他力ながら、珍味と称する数々を持ち帰ったことは、楽しい思い出の一つである。まだ日の高い中に寺に戻れば、村の人達が、変り者揃いと見える吾々の寺に居ることを聞きつけ、おそらく床の間に大事にしまってあったと思われる様々を持ち寄って下さる。珍しい貝、うみまつ、中には海底から捨ったという鯨骨までの寄付である。

夜は、いがいとかめのての珍味で一献を傾ける。いがいは意外においしく、共生のオオシロビンノまでうのみにしてしまった。かめのては亀を思い出して、賞味するまでの舌の修練ができていなかった。

大きな標本瓶、籠瓶、くだ瓶数本に一ぱいの収穫に満足感を覚え、一杯のアルコールがねむ気を誘う。だが夢の中には、幾度か大きなかめのてが去来した。幾片かのかめのては腹中にあって消化液に溶かされつつこの嫌な夢を送り出していたのかも知れない。

（木田小学校　小林貞七記）